

David Daiches: *Some Late Victorian Attitudes*

山 田 泰 司

60 年以上に及ぶヴィクトリア女王の長い治世 (1837—1901) を前・後期に分けるとすれば、1870 年あたりをその境とするのが適当であろう。1867 年に第 2 次選挙法改正案が議会を通過し、新たに都市の労働者が選挙権を獲得する。そして 1868 年からはグラッドストンのひきいる自由党の政府になり、それは 1874 年まで続くが、その 6 年間の政策はすべて、新しい社会に適應するためのものであった。初等教育令が敷かれ普通教育への道が開かれ、オックスフォード、ケイムブリッジ両大学が非国教徒にも開放される。文官の登用に、これまでのように推薦によるのをやめて競争試験が採用されるようになり、軍隊においては将校職の購買制度が廃止され、かつてチャーティストの要求の一つであった無記名投票が実現する。労働組合がその増大する勢力に見合う権利を公式に認められたのも、この時期 (1871—75) であった。このように 1870 年前後の数年間には、たしかに歴史の胎動が感じられる。こうした社会的変化に呼応するかのようには、1870 年は文学の領域でも象徴的な年であった。この年に、当代随一の人気作家であったディキンズが急死する。この頃までには、ヴィクトリア朝前期の作家たちは、たいてい沈黙してしまっている。マコーレーは 1859 年にすでに世を去り、サッカーレーはディキンズの 7 年前 (1863) に他界している。カーライルは 1881 年まで生

き続けるが、1865 年以後筆を断っている。ミルは 1869 年に最後の著作『女性の隷属』を発表し、ダーウィンは 1871 年の『人類の由来』をもって進化論を大成させる。テニソンとブラウニングは 1870 年以後も營々として書き続けるが、それぞれ 1850 年の『イン・メモリアム』、1868—9 年の『指輪と本』のような初期の成功を、その後、繰り返すことはなかった。そして、代わって新たに登場する作家は、ペイターであり、ワイルドであり、W. H. ヘンリーであり、キプリングであり、スチーヴンソンであり、ジェイムズ・トムソンであり、ハウスマンであり、ハーディであり、コンラッドであり、バトラーであり、ショーである。これらヴィクトリア朝後期の作家たちを全体としてみると、前期の作家たちとは、なんとなくちがいが感じられる。そのちがいはどこにあるのか、さらにこれら後期の作家たち相互間の人生に対する態度には、どのような異同が認められるかを検討しようとするのが、この本の主題である。

本書は『批判的英文学史』その他多くの好著を通じて、わが国の英文学界にもよく知られているイギリスの英文学者デーヴィッド・デイシエス (現サセックス大学教授) が、1967 年 11 月、招かれてカリフォルニア大学ロサンゼルス校において行なった特別講義のテキストをまとめたものである。序文によれば、このような題目をえらんだ理由の一つは、19 世紀末に広く行きわたっていた懷疑、不安、反抗、伝統からの疎外感が、今日、旧世代との断絶を深く意識し、不安を感じている現代のアメリカの青年たちにとって、特別の興味とかかわりをもつのではないかという気持ちからであるという。1 世紀前の作家たちの人生や社会に対する態度が今日の青年たちの人生観や社会観と同一ではありえないにしても、既成の秩序や価値体系に対する不信または反抗という点では、確かに両者に共通するとこ

ろが少なくないといえるであろう。

英文学史でこの時代を扱った箇所を読むと、われわれはひどい混乱を覚える。それはこの時代の文学の絶対量が多すぎのためばかりではない、作品の意図や傾向があまりにもちがっているように思われるからである。たとえば、ワイルドとキプリングが耽美的対奮闘的というふうになった対立するものとして評価されている。それはこの時代の文学の豊かな混沌を示すものだと言ってしまうそれまでであるが、同時代人として、このふたりの文学の底に流れているものの間に何か共通するものがないのか、そうした疑問がわいてくる。この時代の作家たちを多くの文学史がやっているように個別的にではなく、相関的にとりあげることによって、以上のような素朴な疑問にひとつの回答をあたえてくれるのが本書の特色といえよう。

ヴィクトリア朝社会を支えていた1本の太い柱は福音主義（Evangelicalism）であったと言われる。ニューマンのようにカトリック教に改宗した宗教家においてさえ、あの生真面目さは福音主義精神のあらわれであったといえよう。デイシスは、かくも多くのヴィクトリア朝人が神の存在について苦悶したのは、あらゆる人間的価値がそれに依存するように思えたからだという。18世紀啓蒙時代の人たちとはちがって、ヴィクトリア朝人にとって懷疑は幸福な精神状態ではなかった。少なくともヴィクトリア朝前期の作家についてはそうであった。テニソンが『イン・メモリアム』で試みたように、そこから何とか抜け出そうとするか、クラフのようにアイロニーで自分を苦しめるか、「ドーヴァの岸辺」におけるアーノルドのように信仰の衰退を歎くか、ジョージ・エリオットのように不可知論的倫理を展開することができる場合でもピューリタンのきびしさをそれに加えるというふうであった。

ここでデイシスが後期ヴィクトリア朝作家の態度への橋渡し役として、とくにとりあげているのはジョージ・エリオットの立場である。この女流作家は1873年に「神と靈魂の不滅は信じたいが、義務は至上絶対のものだ」という意味のことを語っている。すなわち、ジョージ・エリオットにあっては、非国教的良心（nonconformist conscience）と懷疑主義とが共存していたのであって、このことはヴィクトリア朝後期のストイシズム、それ自体目的と化した雄壮な堅忍の精神を暗示するものだという。堅忍によって達せられる何らかの道德的目的よりはむしろ堅忍そのものに価値ありとする態度は、たとえば W. H. ヘンリーの1875年の詩 'Invictus' 「われをおおう真暗闇の中から / 征服されざる魂をもてることを感謝す / 神の何者たるかを知らざれども」にあらわれており、ハウスマンの「誇り高く満たされざるわれら人間の悩みは / 太古よりのものにして尽きざるべし / 堪えうるなれば堪えざるべからず」という詩行にも、そうした態度が要約されている。また、ハウスマンはマニアスの版本の序文の中で、従来の編者たちの知的怠慢を責め、「いかに統御されており、なにゆえに創られたかは知らぬが、この世はなまけ者の憩う羽根ぶとんではないのだ」と言っているが、このことばはハウスマンのストイックな行動主義を物語るものである。バイロンの行動主義と19世紀後期の作家たちのそれとのちがいは、バイロンが福音主義以前の感性に根ざっていたという点にある。バイロン描くところの主人公は、そのメロドラマ的憂うつとか漠然とした罪悪感にもかかわらず、ある華やかさ、ある種のだて者ぶりを示しているが、それはヘンリーのまじめな武者ぶりともハウスマンのストイックな厭世観とも異なるものであるとデイシスはいう。19世紀初めの福音主義キリスト教はイギリス人の感性におい

て分水嶺をしるしたのである。ダーヴィンの進化論や聖書の高等批評などによって、さまざまな宗教的疑惑が生じたけれども、奮闘の生き方がそれ自体で目的であることには変わりがなかった。懷疑的行動主義と結合した懷疑的ストイシズムとでも言うべきものに、われわれは 19 世紀後期の英文学において度々出会うのである。

この意味でキプリングの場合はとくに興味をそそられる。キプリングの作品の多くには、福音主義的感性が帝国主義を凝視することに向けられた形跡が明らかである。彼の作品を読めば読むほど、彼の説く奮闘の努力は何ら究極の目的をもたないものであることが実感されるとデイシェスはいう。今日、われわれはインド人にせよアフリカ人にせよ決して自治能力を習得できないのだというキプリングの帝国主義的見解を遺憾に思うけれども、彼がそのような見解を主張するのは、けっきょくは何物も成就できない帝国主義というものの空しさを証明するためなのであった。帝国主義は、その真の目的は帝国主義者の忍耐力を試すためのものであって、それ自体、自滅の運命にあるというのである。およそジョージ・エリオットとキプリングほど相異なる作家はないであろうが、キプリングの芸術家としてのもっとも深い洞察は、ジョージ・エリオットの「義務は至上絶対のものだ」というあのことばに要約されているといってよい。ただ、ジョージ・エリオットの義務観は人間性に対する彼女の理性的でヒューマニストらしい態度と深く結びついていたが、キプリングのそれは、けっきょく、そうではなかった。彼が英国の「誇りと運命」と呼ぶところのものは、何ら理性的な究極の目的なしに英国に課せられた宿命的責務であった。キプリングの世界の恐ろしいほどの空虚さ——彼の作品の奥にはニヒリズムにひじょうに近いものがあるというデイシェスの観察は正しいであろう。

また、英国に帰化したポーランド人として、コンラットには、特別の問題があり、彼の作品の底を流れるベシミズムは明らかにこれらの問題と関連があるが、けっきょくは、人生に対決する唯一の方法としてさきに述べた行動主義的ストイシズムのごときものが、作品からにじみ出ているという。

以上指摘したことは、すべて、英国人の物に動じない伝統的な態度に関連があるにしても、こうした態度が時に考えられているほどには伝統的に英国的ではなくて、じつに 19 世紀の後半になってはじめて十分に姿をあらわすものであることにデイシェスは注目している。この態度は、ちょうどこの時期に真に開花した英国のパブリック・スクールの気風と関係があらうし、さらにこのストイックな行動主義の無目的性は、キプリングの短編にしばしば反映されているはにかみ——理想や究極の道徳的目的を告白することをいやがる気持——などとも関係があらう。また、哲学的目的を明確に要領よく述べることを信用しないイギリス人のプラグマティズムの伝統などとも関係があらう。プラグマティズムとは、俗な意味では、背後の理屈をあまり気にしないで、とにかくことをやってのけることを意味する。これは、目的ははっきりしなくても我慢して最後までやり通すべきだという姿勢にはなほだ近い。つまり忍耐が理解の代用物になるのである。

ここで、もう一度ジョージ・エリオットに戻れば、エリオットにとっては忍耐は理解の代用物ではありえず、道徳的行為は明確な人間の目的に至る手段なのであった。世紀が進むにつれて次第に衰えて行くのは、ジョージ・エリオットの見方のもつ強力な理性的要素なのだ。デイシェスはいう。ミルの人間味豊かな理性的功利主義がヴィクトリア朝後期の作家たちの倫理的基礎になってもおかしくなかったのであるが、ミルの哲学を拠り所とした

世紀末の重要作家は思い当たらない。つまり非国教徒の良心は信仰よりも理性よりも長く生き残ったことになる。その結果、ヴィクトリア朝人が前例のないほど多量に生み出したのは不安であった。

つぎに、デイシスはヴィクトリア朝後期の態度につながる作家としてアーノルドをあげる。アーノルドはあの有名な詩「ドーヴェの崖辺」において信仰の衰えを歎いたあと、恋人とたがいに誠実であろうと誓っている。このような、いわば「個人的関係の強化」は・ロマン主義運動の一面であり、ヴィクトリア朝の不安の時代よりかなり前に始まったと主張できるにしても、ロマン派にあっては個人的関係の探求が真実を発見するための手段であったのに対して、ヴィクトリア朝のアーノルドの場合は、真理が発見できない世界からの逃避の手段になっており、その結果、「ふたりだけのエゴイズム」に類するという様相を示していることが注目される。こうして個人的関係がひじょうに大きな、ほとんど堪えがたい役割を受け持たされることになり、それがあらゆる人間的価値を提供しなければならない役目を負わされる。そして、これこそジョイスからロレンスにいたる文学の大きなテーマのひとつをなしてはいないのだろうかとデイシスは指摘する。しかも、「ふたりだけのエゴイズム」の向う側に家庭的関係が位置しているとするならば、内側には、自己への全き没入、孤独な内省がある。信仰上の不安がストイックな行動主義を生み出すことができたとすれば、それはまた理想的受動的態度をも生み出すことができたのである。アーノルドにはその両方の跡がある。テニソンについても同じことが言える。アーノルドにもテニソンにもストイックな行動主義の跡があることはたしかであり、アーノルドは「苦しみが行動にはけ口を見出さない」詩を慨嘆したにせよ、これらふたりの詩人の特性をもっと

もよく示している情調は憂うつを味わい楽しむ気分である。そして、この種の気分情調詩が19世紀末の耽美運動の重要な一面をなしているという。この気分はハーディやハウスマンなどを圧迫したのと同じ疑いや不安に應えるものではあったが、その反応は内部的感情への全面的な逃避という形をとったのであった。

われわれは普通ヘンリーやキプリングのような行動主義者とワイルドのような耽美家とを対比させて考えるが、芸術のための芸術と忍耐のための忍耐との間には妙に相似したところがある。キプリングの掟や義務の究極的無目的性には、その内的一貫性に由来する一種の美があると言えないであろうか。こうした類似を認めようと認めまいと、世紀末の耽美家たちの信条はハウスマンその他すでに論じた作家たちの究極的価値や目的についての疑念と同じ疑念に対する反応なのであった。ダウソンの詩などには、メロドラマ的に絶望の表現がそのまま絶望に対する代償作用になっている。外的価値の世界をまったく欠いた詩人の最後の手段となっている。この場合、『文芸復興』のあの有名な結論において、経験それ自体のための経験の強烈化をすすめ、芸術をそのような強化に至るための方法として説いたベイターがもちろん予言者である。

ワイルドは「あらゆる芸術はまったく無用のものである」と言ったが、耽美主義のことばでは有用性というものを定義すべき方法がないのだ、とデイシスはいう。有用性というのは客観的価値体系に依存することばである。ところが耽美的価値観はまったく唯我論的である。耽美家が求めるものは個人的な内部経験を倍加し多様化することだけなのである。また、ワイルドの喜劇、たとえば『真面目が第一』などでは、人間の行動はすべてスタイルに、つまり規則に従って行なわれる規約に還元されてしまっている。つまり人生

がいわばゲームとなっている。ゲームについてのポイントは、それが永遠の価値とか真理に従ってではなく、そのゲームの規則に従って行なわれるという点にある。また遊びの、うひとつの要素はそれがしばしば競争の性質を帯びるということである。ワイルドの喜劇には、この両方の要素がある。その中では社会生活はゲームの規則に従って行なわれ、このルールを人々が器用さをきそって適用するところからウィットが生まれる。興味ある人間の場面を、内部的に首尾一貫はしているがまったく恣意的なルールに従って行なわれるスタイル競争に還元するところにワイルドの喜劇が成立する。キプリングの詩に「ゲームはそのゲームの遊び手以上のものだ」ということばがあるが、これはワイルドの喜劇に通ずるのではないか、キプリングの技術観は、外的な目的を考慮しないという意味で耽美的なものなのであった、とデイシェスは指摘する。ヘンリーもその美術批評において純粋に具象的および「文学的」な絵画を攻撃し、スチーヴンソンも「目的を忘れ……技術的プロセスを愛するように」と美学生たちに忠告した。とすれば、ワイルドが有罪の宣告を受けて後、英国人がワイルド一派の作品をすててキプリングやヘンリーの作品をさがし求めた時、彼らは自分たちが思ったほど進んではいなかったことになる。今日から見れば、耽美主義とストイックな行動主義とは盾の両面と見ることができるという。

ヴィクトリア朝後期の懐疑の文学を読んだあとで、ジェイムズ・トムソンの『恐ろしき夜の都』を読むと、われわれはびっくりする。トムソンはヴィクトリア朝的不安を感じていないのである。しかし、この詩の中で「必然」(Necessity)でもあり「憂うつ」(Melancholy)でもある翼をつけた女性の大ブロンズ像が、撓むことなく、その意志を遂行しようとしているのを見ると、われわれはそ

れがキプリングの説く忍耐の権化であることに気づくのである。ただし、この詩においてはストイックな行動主義が人間のためではなく運命の女神のためのものになっている。トムソンはヴィクトリア朝の理想を正面から攻撃した。彼はアーノルドのいうヘブライズムの価値を全面的に否定したとデイシェスはいう。バトラーについては、ワイルドとの共通点が意外に多いこと、バトラーの『万人の道』をヴィクトリア朝風批判の書と読むは誤りであることを説明し、「懐疑主義 + 非国教徒的良心 = ストイシズム」、「懐疑主義 - 非国教徒的良心 = ウィット」という示唆に富む公式を提議している。そして、最後の章では、ウィリアム・ヘイル・ワイト（筆名マーク・ラザフォード）を、非国教徒的良心と懐疑主義との融合を試みた誠実な魂の持主として重要視している。本書によってわれわれはヴィクトリア朝後期の文学についての貴重なパースペクティヴをあたえられた。このみごとな素描を塗りこめる仕事がわれわれにゆだねられている。

David Daiches: *Some Late Victorian Attitudes*. 1969. André Deutsch.

御輿員三著『ことばと詩』

河村 錠一郎

I 君、『ことばと詩』はもう通読しましたか。「絶望からスタイルを学べ」というエンブソンの一行が題詞になっていますが、これはじつに象徴的だと思いませんか。というのは、この本を一読すると、著者が「スタイル